

関西学院大学名誉教授 細川正義

第24回

歴史の縛りから離れて、〈自由〉に人間を描くことを求めた 森鷗外

— 『山椒大夫』の安寿と厨子王に見る人間形象のリアリティ—

一九一二年九月一三日青山斎場で行われた明治天皇大葬に参列した鷗外は、途上で乃木希典夫妻の殉死の報を聞いた。ドイツ留学時代に出会ってから長年親交の深かった乃木の訃報を聞いて鷗外は深い感銘の中で一気に『興津弥五右衛門の遺書』を書き上げて「中央公論」の一〇月号に掲載した。小倉時代の細川藩で生じた家臣の殉死を取り上げて、その歴史的事実に対する資質的関心の中に乃木の殉死への賛歌の心情を重ねて書き上げたものである。次に書いたのが『阿部一族』であり、今度は武家社会における殉死の在り方に対する近代的な関心を持って書いたのであるが、『阿部一族』も熊本に移った細川藩で起きた殉死に纏わる歴史的事実を素材にしたものであった。そしてこれを機に鷗外は積極的に歴史に素材を得た歴史小説を書き始めて行くことになる。『大塩平八郎』『堺事件』などがこの時期に書かれている。

そうした自らの歴史小説の手法に対して鷗外は一九一五年一月の「心の花」に「歴史其儘と歴史離れ」と題したエッセイを掲載した。

わたくしの近頃書いた、歴史上の人物を取り扱った作品は、小説だとか、小説でないとか云つて、友人間にも議論がある。しかし所謂 *normative* な美学を奉じて、小説はかうなくてはならぬと云ふ学者の少なくなつた時代には、此判断はなかなかむづかしい。(略) わたくしは歴史の「自然」を変更することを嫌つて、知らず識らず歴史に縛られた。わたくしは此縛の下に喘ぎ苦んだ。そしてこれを脱せようと思つた。(傍線細川)

このエッセイは、鷗外の書いたこれまでの歴史小説が歴史的事実に縛ら

れすぎて、登場人物たちの〈自由〉を制限してしまつていたことへの反省を示したものであり、そうした歴史の縛りから解放された小説を書きたいという宣言を示したものと取り上げられてきた。そうして新たな意図を持つて書いたのが、中世の終わりごろから近世のはじめにかけて流行した「説経節」と呼ばれる語りものの一つ「さんせう大夫」をふまえて書いた『山椒大夫』であった。更に鷗外は「歴史其儘と歴史離れ」において、「わたくしは伝説其物をも、余り精しく探らずに、夢のやうな物語を夢のやうに思ひ浮べて見た」と書いているように、この作品は材料として「説経節さんせう大夫」のストーリーを用いて、しかし、登場人物の安寿と厨子王を、原材料に縛られること無く、鷗外の心情を仮託して、自由に形象し、まさに「夢のやうな物語」を展開しようとして取り組んだのであった。

『山椒大夫』は、平安時代末期に、陸奥国の掾(令制の官位)であつた平正氏が、国守の罪に連座して筑紫国に左遷されたことから始まる。母と共に幼い姉弟安寿と厨子王が父に会いに行く途中、人買いに騙され離れ離れにされてしまい、姉弟は丹後国の悪名高い分限者・山椒大夫に売られ、潮汲みや芝刈りをさせられ辛い日々を過ごす。或る日二人が芝刈りに山の頂上まで来たとき、安寿は厨子王に、神仏の加護を信じて脱出して父に会いに行くことを強く勧めた。姉の言葉に逆らうことの出来ない不思議な力を感じた厨子王は、麓をめがけて駆けだした。厨子王を見届けた安寿はその後沼に入水して命を絶つた。

途中関白師実と出会い、厨子王の持つていた守り本尊のおかげで娘の

命が救われた師実は、厨子王一家の気の毒な事情を聴き、正氏のもとへ赦免状を送ったが、既に正氏は亡くなっていた。

元服して正道と名乗った厨子王は丹後の国守になり、任国での人身売買を禁じ、山椒大夫の家でも奴婢を解放し、賃金を払うようになった。

安寿の入水した沼のほとりには尼寺を立て霊を弔った。母の安否を尋ねて佐渡へ渡った正道は、農家の庭先で雀を追う盲目の老婆を見かけたとき、彼女が生き別れた子供のことを口ずさんでいるのを聞いて母であることを知り駆け寄った。厨子王が持つ守り本尊を母の額にあてると母の両目が開き再会を果たした。

このように仕上げた作品は、もとの「説経節さんせう太夫」では、厨子王を逃がした安寿が拷問で殺され、国守となった厨子王は山椒大夫を白洲に埋め、息子の三郎に首を竹のこぎりで引かせて殺したり、残酷な場面が多い。鷗外は「歴史其儘と歴史離れ」で「夢のやうな物語を夢のやうに思ひ浮べて」みたいと書いたように、そうした残酷な場面を描いた原話からは離して、安寿の自己犠牲と、厨子王が姉の思いを胸に懸命に逃げ延び不運を克服して成長し母との再会を果たす「新しい明治の物語」(前田愛『少年少女日本文学館①たけくらべ・山椒大夫』(講談社)の「解説」、一九八六年二月)として作り上げている。

そのような作品構成からみても鷗外がこの作品に「歴史離れ」の(自由)を求め、「夢のやうな物語」への思いを託して描こうとした主題が安寿と厨子王の人物形象に焦点があてられたものであることは間違いない所であるが、この点に関して水谷昭夫は、「山椒大夫」の主題のモメントとみられる安寿の死は、まさに近代小説史上比類を絶した美しさである。」と評し、「さあ、それが運うんごしよ。」と言って厨子王の出發を促す場面によって、作品の美は「見事な完成へと昇華結実せしめている」と卓越した論をまとめている(『近代日本文芸史の構成』桜楓社、一九六八年五月)。大岡昇平は「歴史小説」について、「歴史家はその記述の客観的妥当性が問われるのに対し」「人間の内部は小説家にとって、最も自由に腕を揮うことができる領域である」と述べている(『歴史小説の

問題』文藝春秋、一九七四年六月)。「山椒大夫」はまさに大岡の言う登場人物の内部の描写に鷗外のこの作品へのねらいが集約されており、この人間形象のリアリティにこそ「夢のやうな物語」として描いた作品の確信が示されているということが出来よう。

一方西成彦は「森鷗外の「歴史離れ」とは、「近代」という名の政治の介入によって史料を踏みこむ」ことでもあるという指摘をしている(『胸さわぎの鷗外』人文書院、二〇一三年二月)。その一つに『山椒大夫』では、国守になった厨子王が奴隷の強制的使役を禁止し賃金を支払わせるように改革したこと、それによって山椒大夫の「一族はいよいよ富栄えた」とあるのは、作品の時代が平安時代末期に設定されていることを考えれば、「結果的には「歴史」の改竄」に当たると指摘している。恐らくそうしたことへの躊躇も含んでのことであろうが、鷗外自身はこの作品の反省点として「歴史離れがしたさに山椒大夫を書いたのだが、さて書き上げた所を見れば、なんだか歴史離れが足りないやうである」と述べている。「歴史」の改竄を恐れずに近代小説として登場人物の心情に作者の理想を託して「夢のやうな物語」を書き上げ美の世界を獲得することをめざし、同時に歴史小説として「歴史の(自然)」を損なわないように腐心しながら近代小説のリアリティを確立して行くことの困難さをうかがわせる鷗外の言葉であるということも出来よう。

このように「山椒大夫」は鷗外最初の「歴史離れ」を方法とした歴史小説として、作者自身の逡巡があることもこの作品の観賞においての一つの関心事として興味深い所であるが、作品の評価としては、人買いや奴隷が安易に行われる時代を背景にして、そうした暴力に抗って懸命に生きる安寿と厨子王、そして、如何なる状況下にあつても我が子の無事を願う母と、彼女がつぶやく「栗の鳥を逐ふ」の詞を聞いて感極まつて俯伏した厨子王、権力の側にあつても、幼い二人に心づかいの言葉かけた山椒大夫の息子二郎など、個々の人間形象に綿密な配慮を施して、理不尽で過酷な時代の中でこそ光彩を放つ真の人間の姿を浮き彫りにしている所にこの作品の魅力が鮮やかにうかがえるであろう。